

特57

537

非
優
評
判
記

明治十九年二月廿四日 内務省 附刊



當評判記も新舊座休業ふつれ暫く發兌も不仕候處今
般久々に七開業又付黒表素も俱又出版致し升れば澤
山多求めの程願士升分ては説申上するハ假名垣翁序
文の議にハり升る昨年ハ役者も不揃て出勤の坐も
復是くるハ升て役者位附見立評共出來兼升たに付序
文も加ハせしめ給ふと申せば粗漏千萬ある編集もて

五最負又多愛讀下なるは客標へ甚だ相濟ざる次第よ
ムり升れと興行の芝居の体裁につれ升事よてよん處
無のやうある素人芝居見た様亦出版物實ハ本編ハ發
兌も如何致し升ふやと存あり升たる處初編已來多馴
染の投書家并に外多高評の五投書も参り升たれば夫
又引たてられ相替りす五一覽と願事に相成升た本年
ハ役者位附見立評假名垣先生の序文も開口にさ
入きつとゆうめ合と致し升れば今般のハ積古芝居と
もハ見免一を願上奉り升
○役者の順次は役割番附の格又列ね升たれば左様よ
多承知と願う
○千歳坐の藝評も附録又記し置升れを五覽と仰ぐ幸
ハ投書家の評言ムりも升ればのせ置升た

撰者 梅素 薫

高須 高燕
補助 六二 惣連

○新富座狂言名題

一番目 仰高四方 有職鎌倉山 四幕
御最負

中幕 老樹曠紅葉直垂二幕

新歌舞伎 十八番之内 船辨慶 市川團十郎 市川左團次 市川海老藏

白浪 中村芝翫 中村福助

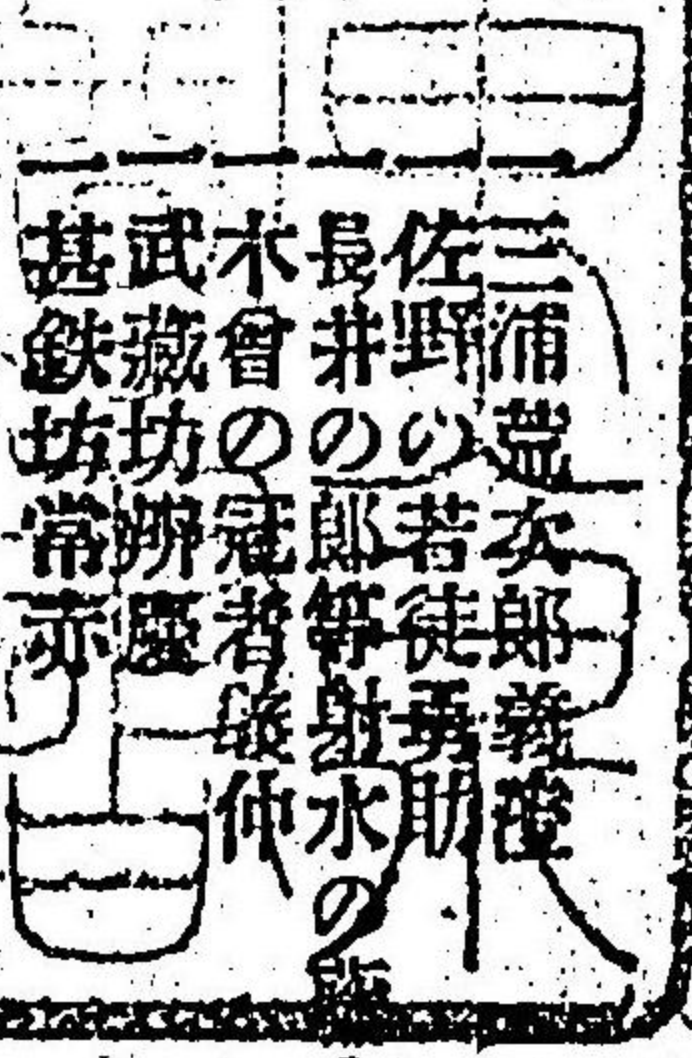
大谷門藏○市川團八○市川升藏○市川

新藏後見市川左伊三○市川幅之助○市

川團子

淨船弁慶の 瑠其跡へ祝 水鳥記熟柿生酔 物座中のこらす罷出候

第二番目大切又常盤津連中相勤申し



市川左團次

○高島屋大當春千歳座馬場の節出勤限まで承て休業よ
てお願と見せられ横濱へ一興行出勤二府下最負の方
々懸しがつてなられ升たが今回自分新富坐主の後見人
大任又据られ久々よて普請も出来して蓋を明らかれ升た
大層か人望強勢を俳優も成れ升た○一番目ハ四年振あて
東京登りの末廣屋相手よ「有職鎌倉山」が演升た則ち役ハ
三浦荒次郎義澄此丈よの持て来いのはまり役三立目鷹野
の場拵ハ万端申分あく人品ハ有出頭の若殿とい何處へ出
しても急度見升さぞ爰と言新手を趣向もあく只さらく
どこかきてゐる内よ十分の當りの見升た感心く○四立
目建長寺法會の場長上下の若こかし申分無此狂言の押物
よて源左衛門よ供物を呉る時刀の切先へまんぢうと差
て出すハ紋切形なるが近年ハ是を止めてハ此仕打ハ實ハ
乱暴狼藉あり一箸よて狭み遣る振をよておらす振事はを
源左衛門が袂を引て落させて請取事よあり升た（實ハ是
も感心せず）是より立んとすると呼留られ鷹野で落した

密書を種々諫言せらるゝ處善心に立戻つた振をして密書を取歸せ處の實惡の本分甘い事こそされ評より口せりふの内よ源左衛門へ對し「これ程に申上ても」ト言れ升たが執權職がいかにも惡事露顯の誤り口上ありとて小身者と言人に向つて「ト噂過た言葉と聞へたり」ト、密書を取歸し傍らよ有燭臺の燈よて焼れ升が一体法會の朝未明でも有ると思ひあり「又(門藏)のせりふよ」最早時刻も未の上刻」と言れ升たれば舊八ッ時ありて見ると晝の内ふ燈の有のもかかゝい物あり○松の廊下の場何の仕打もさく上手の襖の内より烏帽子大紋よて出て來り源左衛門も出會し扱打よ切られる處刀よ手を掛た儘落入處凄い程能ムり升たケ様も物足の振事の處にて看客よ得心させるゝ此丈の得意實は感伏く

○佐野の若徒勇助役是又(廷升丈)打て付の役拵へ万端若徒相應通常の好にて申分無○最初の出花道より立歸り來り下馬先の噂さありとて主人の恥辱を請へ次第を語り残念がる處大さよ吉○後主人が三浦親子よ取入んとする心中と聞強異見よある處突込で仕らるゝ故一點の透間をし此場の役者揃と言皆々はまり役故面白事でもムり升た

○中暮實盛お郎徒射水の藤太役齋藤五(小團次)齋藤六(

福助)兩人が都より尋ね來り初陣せんと親實盛も願ふ處俱くよ取成介抱する處さしたる役でも有升んが何しかふ此丈の事あれば舞臺立派よ成て能ムり升○爰も此丈の感心あのケ様も中つ抱き役を仕らるゝと穩當にて舞臺の邪魔よあらず余人よ十分よ狂言をさせらるゝのふーざよ妙よ得てムる事といつても感伏し升事でムるゝ○兄弟を送り出立歸つて見れば實盛の鬢髻を墨よて染てゐるよ驚き討死と聞悲しみ別れの盃を汲處のさしたる事も無けれと愁ひも有て申分無

○同トく木曾義仲役首實檢の場人品も吉木曾育ちの荒大將の氣持見へて請升た拵へも相答して難する處あり○手塚の光盛(小團次)が實檢よ備へんと持參の首のもしや實盛での無の心付今井(宗十郎)樋口(團十郎)を呼出見分させる處いよく夫と分り是より腹巻桶の上へ首よのせひさまづいて敬ふ處に此場中眼目の場よて「義仲よ三人の親あり先生義賢の生の親實盛の命の親兼造の育ての親今三人の親よ分れ思も報せず云々のせりふの處のとうくどいて涙みさく愁をふくみ延られ見物一統泪をこぼし升た感伏く口せりふ万端時代を調べ貴賤上下と分ち作つたとの聞升たが親義賢の悪源太に討れと言れ午たが

成べく此惡と言字と抜て源太義平と言れたら如何と思
ひれ升て○幕切のエイ／＼チウの凱歌を上られ／＼勇ま
しく能幕切でムリ升た

○船辨慶は則ち武藏坊弁慶役(廷升丈)の毎度謠曲掛りの
狂言にハワキ師だこの入てムる位故お手の物／＼持へハ
勘進帳の弁慶をつくらと云好み万端申分無の大出来で
ムリ升た口勘進帳をさせて見度と見物が賛成升たハお仕
合實に舞臺お根が生た様でムリ升た○後シテのつあざお
一寸雜風の物語りを仕ふる、處勇ましく大請／＼

○氷島配の淨るりも甚鉄坊常赤役大酒好の坊主あて始終
可笑味交ての仕打愛敬有て能ムリ升た三人生酔の内笑ハ
上戸の振事大出来／＼

今回ハ一番目ハ中幕淨るり迄數／＼の役を夫々仕分られ
殊ハ何れも大出来大當りの評もあがら見物と悦む
せる愛敬の高島屋内外共ハ人望の親玉／＼

市川小團次

一將軍實朝公
一長井齋藤五
一手塚太郎光盛
一齋の者狸々の升吉
○小高の米升丈久／＼大坂表五修行よてお顔と見升んで
したが今回當坐出勤よて目出た／＼黒表紙の押物祝ふ
て盡ツム升ムシヤン／＼／＼○一番目三立目ハ將軍實朝

公の役扱へ万端申分無荒次郎ト源左衛門が鶴の手柄争ひ
の時荒次郎の手柄ハ記録ハ殘一源左衛門へハ御刀拜領の
件ハ歌舞伎新報ハ記し有升たが舞臺よてハ其事ハ是ハ
御成先よて臨時御刀拜領と云事ハ無事ありと方今の活
歴屋さんの異見杯よて扱ふ成たとの云様ハ事あるべきが
ヤハリ芝居ですら有方ハ見物の瘤飲が下る處で有升て
のやうに都て芝居事を零す様ですと面白味ハ薄く成芝居
好ハ嘆息の事でもるて

○建長寺法會の場ハ大名鎌田何某よて焼香あり御供物
頂戴の役五苦勞でムリ升た出勤よて場が何となく立派
引立升たハふ／＼ぎき物あり

○中幕老樹曠ハ長井才藤五役弟齋藤六(福助)と俱ハ都よ
り父實盛の陣ハ加ハらんと小具足よて來る處よし父實盛
ハ殊の外ハの瞋りよて早速都へ歸れ彼是ハておらハ勘當
りと叱らる、處兄弟ともハ至極釣合よく大出来でムリ升
た合才袋を脊負たる好み目新くして請升た○さて此場
へ悴兄弟と都より來らせ親子別れの愁を聞す狂言と持へ
る作者の働らさど云物の實ハ感伏事と大請／＼

○手塚太郎光盛役首實檢の場ハ實盛の首を錦の直垂の袖
へ包み義仲の寶檢ハ備んと出來る役此役ハ能役あて物語

りも相應にこゝろされ申分な一爰と云て罷立る仕打も有ま
せんが一体又上評でムリ升た

○水鳥記に鶯の者狸々の升吉役のやうな役の此丈の跡ふ
有とまり役故申分無振事も一寸甘い事でムリ升た

- 一長井齋藤六
- 一勇婦巴御前
- 一舟頭岩作
- 一底深娘龜子

中村 福助

○方今若手の賣出し役者成駒屋の若旦那久敷お顔の見へ
ぬので最負の娘連の大待兼大層な人氣でムリ升今回一番
目よ何の役もあく中まく實盛よりの出勤又長井齋藤
六の役拵へ万端申分なく(小圃次)と兄弟の釣合よく大出
來爰と云て見せる仕打も有升んが請升た

○同トく首實檢の場より勇婦巴御前の役めつ相美く
赤地又巴の織出したる錦の鎧下故道具まく振落と目
覺る様もて鎧武者の中へ女武者一人故何となく愛敬が有
て能ムリ升れさしたる狂言も無れ仕打もあけれど大出
來で有升た

○船弁慶より狂言師船頭岩作役是の白浪の間と親御と二
人よて割て仕られた物もて船唄の手踊り(芝翫丈)と五兩
人美事を事でムリ升た

○水鳥記より底深の娘龜子役されいゝ振事も美事ム

り升た(左圃次)の合手よ酒の勝負よ勝後又腹立上戸よ成
處愛敬有て大出來

- 一源左衛門妻玉笹
- 一踊りの師匠水木鳥代

澤村源之助

○鎌倉山より源左衛門妻玉笹役一体此役の(まう調)の役で
有一が堂言都合よや此丈へ廻つて勤められ一が如何と思
ひありし存外の大出來拵へ万端申分なく品格も有て能
ムリ升た口感心ありの始終懐妊の心持を捨ず腹をいと
ふ仕打の請升た○三人の掛乞を母親も知らせトと氣を兼
て形代を預けて歸す處より後源左衛門踊りて額の疵を見
てさていと覺り夫を諫め武士道と立させんとする處より
夫又離縁を請ての愁まで能出來され升た(まう調)又代つ
て勤る事故最負連の大層案事られ升たが先上出來よて五
安心○此玉笹の役り立お山の持役もて其坐へ住込の女形
一枚にても上坐の役者の處へ持て行べき役なるよお仕合
よ(秋香丈)へ札が落升たが貫目も相應よ有て見劣りなく
適て退られし幾分の位置と上られた物と見へ升五出世

○水鳥記より踊りの師匠水木鳥代役拵へ万端申分なく能い
師匠振でムリ升た(米升丈)合手よちよいと口解もよふの
振事知らかにこゝろされ升た色氣も十分有て上評でムリ升

た今回の終日女形の入らぬ狂言斗りにて役の数も少く見
足さふ思われ残念く來春の何ぞ色氣の有當り役を待て
おり升ノ

○大谷門藏(鎌倉山)千葉之助常胤役鷹野の塲建長寺の
塲ともさ一たる事無れど立役の頭役相應ふてヤ分あり

○佐野郎の塲より質屋手代十兵衛役さ一たる事無○中ま
く首實檢の塲より大夫坊覺明高名の筆者役相應よし○
船弁慶より四天王のツレを勤められ五苦勞でムリ升た

○市川猿十郎(一番目)須山大炊之助役さ一たる事無○
佐野の仲間五十平三浦家より廻し者の敵役能こなされ升
た○首實檢は軍兵○氷鳥記は酒戰の世話人さしたる事無

○中村荒次郎(鎌倉山)和田主計之進の並び大名一通り
也○小間物屋幸七佐野の郎へ掛乞の役是亦一ト通りあり
○中幕平家の落人小豆大納言飯櫃のおかーみ見足りの
うムリ升た

○市川團八(一番目)並び大名○呉服屋番頭○中ま
く軍兵何れも一通りなり○船弁慶は四天王の一人○氷鳥
記より釋次の社中出來升た

○坂東橘次(一番目)並び大名さしふる事無○中ま
く白杵の郎等ひよつとこの神樂舞出來ま一た

○市川升藏(一番目)並び大名五苦勞○中ま
く次と合手よてひよつとと舞出來升た○船弁慶はツレの四
天王一ト通りの出來あり

○市川佐伊助(並び大名)さしたる事あり○中幕より女乞
食飯櫃のわいわいおらしみ出來升た

○市川小半次(今回)相中上分より昇進さされお目度ふ存
升併し役割り一番目より大名中ましく軍兵よてさして腕前
を見せらるゝ處あり

○中村魁藏(頭取)さん舞臺へ出勤なければ評あり此外相
中新相中の衆評を零し升

- 一熊田軍八
- 一伊東九郎助氏
- 一天王下のづふ六
- 中村 鶴 藏

○鎌倉山より熊田軍八役三立目鷹野の塲へ三浦泰村の使
りとして密書を持って出らるゝ處何高半道過た様おて見懸し
佐野郎の塲より三浦家よりの使者として入來り兵衛お取て
みらるゝ役此丈の事なればアク振がいて甘い物でムリ升
可笑味も十分有てよし○一体此役の伯父源藤太と同道よ
て來るが紋切形あるが今回一人よて遣れ升た全体爰へ
源藤太が來り兵衛よ手ひどい目よ逢と言も道理よ合ぬ筋
あればそこらへ心付れ癡一た物と見へたり

○建長寺法會の場へ何某と云（役割は名前無れを分らす尤も堂でも能様は見へたり）大名是のはんの場を立派よせん爲のお勤め故評する處あり

○中幕は伊東九郎助氏役白杵の陣にて軍さ評定に並むる迄の役までさして見處あり

○水鳥記より天王下のつぶ六役よいくの摺梅甘い物でムリ升た日く樂屋浴も有やうなれど何より見物を笑わせ升たのやうき事ハ此丈の得意

○中村鶴子と子役の名前よて役割の呼出し奴明石の傳次と有升のら誰ならんと思ひよ猿若坐の坐主になられた（明石丈）でムリ升た水鳥記の淨るりよ（團十郎）が引連出てお目見得をされ一寸手踊りもムリ升た可愛らしい仕出しの子がう精出して藝道修行し給へまた見物の皆様方もお引立有て名家の跡目相續の榮とわたへ給のん事と祈り奉り升

一佐野源左衛門經世
一今井四郎兼平

中村宗十郎

○末廣屋丈明治十五年後日梅の狂言限よて大阪表へ歸府あされ四年振あて當坐へ出勤一同待てあり升た堂ぞ今回の東京に長く腰をすへられ武道の腕前を顯はさる様祈り升久々のお目見狂言として有職鎌倉山と演は

れ佐野源左衛門常世の役一体此佐野善左衛門と云御番士の至つての肝癢にて天下の爲どの言あが殿中刃傷の騒動を引起した人の由あれば平生かゝりて露仙子あり大はまりの役なれば初日前より町中の評判でムリ升た○三立目鷹野の塙花道より鶴と射留ての出拵へ万端分無荒次郎と一寸手柄争ひあつて理詰せし處荒次郎は前の披露をせん爲と言よつて何分頼むと鶴を渡し下手へ還入る處分なし○將軍のは前よて義澄が我物顔に鶴と知のれが手柄よ言上するお驚ろさ証據をもつて争ふ處よし義澄ハ系圖の一巻と楯無の鎧へかけて目顔で知らせ我よ譲り呉よと言ふよん處無手柄と譲る思入の處十分お答へ升た○後結城七郎（芝翫）へ對し小身者のあさけあさ云々の述懐の處愁一寸泪をうのませ升た皆々還入た跡よて我頼みと聞届呉ん事を言出しよ荒次郎知らぬ振をするおくやしがる處答へ升た○遠御の跡を見送る處（此處よて別格よ評し升るハ例の新富坐の大道具よ珍らゝのらぬ事ながら此同勢下手を出て上手へ行夫方舞臺前を花道の方へ行道具の後ろの書割の置て二重廻りの前より廻つて松並木と引出す處行烈の人數のねり行様お見ゆる工風の實に感心し升た）愛の眼目の場よて昔より名人上手の仕ら

れ一時々種々も評の有處よて三浦親子の悪事を捨ひし密書めて知り天下の爲に討て捨んど心付思はず行當る並木の松と切て捨るが紋切形の幕切あると初日よ刀を振のふり切んどして思入有て切らずに鞘へ納めて幕を切升たが後よ刀も扱ず松の枝を見て松壽千年ものせりふ有て思案の極意の(木のかしらチヨン)爰に有のト腕紐をす幕切マア方今の芝居から此方が小言々無のと思われ升て〇四立目建長寺法會の場ハ誰殿も五存の通り音が焼香の間長い事花道の中程よ据つてゐる處評する處ありお供物頂戴の件に成ての前よも評した通り荒次郎の袂を引仕打刀の切先よりマア此方が穩當でムリ升ふて〇新富坐の大舞臺大名の多いのふ焼香と供物頂戴の長い間花道よ据つてゐる役さを退屈で有升たろう見物も随分だれ升た〇一同坐を立んとするより義澄と密談ありと引留密書と証據よ惡逆の異見をする處迄に此丈の事なれば抜目さく答へ升た金打までして悔悟の様子よ心をゆるし返した密書ハ灰よち一打て替つて惡口さすを無念がる處よりト、頼へ屬よて紙と請る幕切まで上評く透間あり〇五立目同トく邸の場花道より供方を運て歸邸おし何氣さく方丈よすめられ酒よ酔たる振よて是より重代の折紙を質

よ入三百金借受諸拂をする處さら〇とよ〇佐野が酒よ酔たと言あがり酔た仕打が無と言評有〇又投書よ酒よ酔た振を仕るい處が能と言評あり〇爰ら何れが是の非の兩評の内とつちハも團扇が上兼升が江湖見功者連の高評を仰〇是より下坐の獨吟よて書置と認める處一ト通りあり母と妻玉世又諫められ武士道を立よと言るれ也大小を渡し中身の竹光を見せ家名の爲よ三浦親子に取入了簡と本心と隠しゐる處ハ下手でハ出来ぬてれ場あるが進ハ霞仙子得意の熟練何共言の甘味が有て感心で一た後母よ勘當請妻を離縁一若徒再助又暇を遣りト、兼て仕舞ふ處まで上評く〇一ト間の内より親兵衛登掛て出来り不孝者の成敗せんと鎗よて突掛る是よて起上り扇を持ってわいゝろら處合手ハ(團十郎)あり此息込の場ハ息も付ぬ面白味でムリ升た兵衛ハ鎗と巻落され刀と抜て切て掛ると碁盤を以て請たるよ盤をはずに切落され三浦親子を眞此のごとくと父も同意と感拜おし直よ支度して登城ささんとそる處へ母妻勇介も出来るよ跡くの事と夫々よ言聞せ上下を着し花道へ行處を兵衛に呼止られ親子一時お討んとそる時よ返して事の破れに至らん其方が所存いかんと尋ねられ松壽千年も終に朽ぬ若木を討て根と絶んと

鷹野の時より思ひ付たる思案を述る處の双方共、宜つた
 く○殿中松の廊下の場、下城と伺ひく、花道より出る
 處追々下り来る大名、見答められ程よく言譯して進む
 處へ(海老瀬)の大名、異見に逢場もさ一たる事無是より
 三浦荒次郎お下りと、言聲を聞急度あつてツカくと舞臺
 へ來り思入あつて、衝立の蔭へ隠る、處よし○義澄上手よ
 り出来る前へツカくと出てドツカと坐し無言、白眼
 合處よりト、懐ろより白鞘の短刀と出、突然右の肩へ切
 掛跡へ下つて様子を伺ひ倒る、處を止めとさ一本望を違
 一是より心静か、腹へ刀と突立引廻し咽へ突立んとする
 處、幕○退場の斯うと見て見處も無れ共本意をどける
 結局の處、あれ見物の大請で、ムリ升た一体此狂言の筋の
 是迄道具替つて水門の處、成愛へ退れ來り親兵衛に對面
 の處、有升が實録より無事故、今回の癒された物と見へ升
 ○先源左衛門の前も、モヤ通り十分のはまり役故、一點の打
 處もなく雅俗ども大請で、ムリ升た舞臺功く
 ○中幕老樹曠、今井四郎兼平、役實盛の陣中へ忍び來る處
 小具足の上へ茶の胸服様の物を羽織て、ムる拵へ能好みで
 有升た○此役の義仲の内命を請て、實盛を助んと説客、來
 る人、よて數番の問答を、あして木曾の陣へ客分、招待せん

事と進めらるれ共、齋藤の義心金、鉄て心ぞう、このさす討
 死せん事と言放され、余儀なく歸陣すると、言場立際、併し
 いか程討死、あさん覺悟、よても木曾殿の旗下の諸將、陣觸
 ちし長井が陣と見るなら、バ矢一筋も放つ、あとの仰せあり
 と、義仲の報恩心を述る處まで、此場の兩優の、出合、よて見物
 の煙、よまのれて、目がくらみ、醉るがごとく、場中水を打たる
 様、只感伏の外、無で、ムリ升た口、一体此事の本文に、無事
 よて實盛が度々の戦場にて、齋藤が陣と見れば、旗を巻て、逃
 る有様を見て、姿を變て、討死せんと覺悟する件を、作者の働
 きよて、此今井、狂言を持せる趣向、愛の實、感伏し升た
 ○同トく首實檢の場、よて、實盛の首を、目利して、樋口と俱
 に首を洗ひ、白髪、成たを驚ろき、慈歎の處、此場の、只、さら
 く、と振事、されて、れられ升た○是限にて、跡の幕へ、出勤、あ
 く、久一振の見参、よ見足らない心地が、一られ升た、春の河
 を、持前の得意物、を出され、堪能、よせて、下され、や、イ、目末、廣屋
 の大長く

- 一六浦左京之進
- 一高橋判官長綱
- 一神主松尾造酒

市川團右衛門

○鎌倉山に六浦左京之進、並び大名敵役の、あたま、役、佐野、よ
 對し、悪口の、よく、まれ、役、迄、よて、よして、見る、處も、無れ、評す

る處なし只お立派と譽る斗り

○中まぐよの高橋判官長綱此役もさ一たる事無臼杵の陣へ巡檢よ入來り明日の軍さふ討死を約す迄の事よて外よ役な一されハ評もなや

○歌舞伎新報よ佐野の源藤太と難めらるハ様よ出でる升たが今回ハ抜お成てお顔を見ず残念

○水鳥記よ松尾造酒の神主さんおかしみの役此丈の愛敬丈よて仕出來したる處もな一

○中村仲太郎ハ水鳥記に酒屋のでつち與茂太例もあが引立ふれ淨るり等よ遣れお仕合でるが堂も上り目が見へぬやうる氣が仕升が大事よかけて勉強おされや坂よ車のとどへも有升ぞや

○市川新藏ハ外座よてハ團十郎ハ附屬にて付添おられ一が今回ハお仕合よ當坐へ住込れ可成お役も付升たハお手から白首の役者拂庭の折柄おれハ骨折て働さ給へ引ばりハ吉五出世ハ今の間あるべ一一番目よハ並び大名の中へ交り出され升たがさ一たる事無○中まぐよ入谷小太郎安家役長國の首實槍高名の物語相應よこあされ升た○船弁慶よハ四天王の一人お立派く○水鳥記よ世話人五苦勞○中村鶴五郎ハ此文も外坐よて可成よ遣られておられ一

人當坐へ住込れ一ハお仕合堂のお尻よ据て勉強一給へ白首の出來る性故辛抱なされハ五出世ハ今の間あるべし今一回ハ一番目にてハ平賀右門之助並大名役さ一たる事あり

○中幕よ眞下の四郎音直役是亦さ一たる事無併一ふしきよ一寸買目の有性よて見劣りのあさハ感心

○坂東喜知六ハ一番目ハ並び大名○道具屋喜右衛門の掛乞役何れも一ト通り○中幕にハ乞食ハハ飯櫃のばい合ハハ一みの立廻り出來升た○水鳥記よ世話人五苦勞

○市川萬三郎○市川左喜之丞○市川米丸○市川升代○市川鯉藏○中村叶助○市川家之助(是)ハ一番付願でハ一役者ハ順あり)右何れも加賀の遊女にて臼杵の陣へ招かれ酒宴の相手をすると言脚色よて愛へ並べし物なり今回ハ女形ハ入ぬ狂言故名題下の衆達よ遣ふ場が無めえ作者の働らさよて無理にハめて出されたるにて生物を遣うハ随分苦しさ物と見へり○衆さん美一ふムり升た襦ハ古代の大模樣書を忍ぶ思ひがいたしたり

○中村歌女之丞ハ佐野の下女おまき能出來升た

○岩井玄げ松ハ建長寺の長老役を勤められ升た五苦勞ハ事三階不殘大名ハ廻つて勤めてゐらるハ故と見へたり

○源左衛門毋眞弓役例もあがら老母役手よ入た物でる

紋付の襦と始終着てゐられ升たが小身者の佐野家の老母
よハナト仰山過たり

一梓巫子櫛

坂東 秀調

○今回ハ一番目中まく共ニ役ナ一源左衛門妻玉笹と勤め
ふる、嘗ナリ一ニ堂音風の吹廻しふや源之助丈へ代つて
終日顔を見せられず戀しい事でもり升た大切水鳥記の
梓巫子櫛の一役何高色氣の無役めてお氣の毒で有升た振
事もさしなる事ナ一春の花くしい色氣の有役を待升
一白杵三郎重近
一源九郎義經
市川海老藏

○鎌倉山ハ秋田城之助役是ハ大名の一人立役の部さして
役も無建長寺よて焼香の役と廊下の場にてハ經世ハ一寸
異見と一なる役外又見る處おし評もあし
○老樹晴ハ白杵の三郎重近役我陣所へ諸將を招いて評
定の役のみ別ニ仕草ハ一ト通りの事あり
○船弁慶に源九郎義經何高物足りず不評でもり升た

- 一結城七郎友光
- 一俣野五郎景久
- 一船頭三保太夫
- 一地黃坊釋次

中村 芝翫

○鎌倉山ハ結城の七郎友光役三立目鷹野の場よて佐野と
三浦が鶴の手柄争ひの處へ揚幕より聲掛出て双方の証據
と調べる役前さ一たる役でも無れど此丈ハ貫目の見ゆる

處がふーぎ道ハ大立物

○中幕ハ俣野の五郎景久役軍評定の席ハ出あするコ
りさ一たる狂言ハ併一何とあく貫目有て(チット又)立
派

○船弁慶ハ狂言師白浪の船頭三保太夫よて船唄の所作事
トコトンのハ家ハ親子揃つての手踊り面白い事でもり
升た○浪よくの處愛敬有てとんだ能ムり升た年功く

○水鳥記に地黃坊釋次役海樂寺酒殿の場五合入の大盃お
て呑つくりの趣向今少一何の思ひ付の有事の樂一みし
ハ斯うと言面白き趣向もナ一酒お負ると踊りをおどると
言脚色よて高島屋よまけて一寸手踊りよある處わく抜の
した物でもりて口此連中ハ何れも古今の大酒と見へて五
合入の盃さで呑ながら生酔がさつぱり出来ぬもおのーふ
ムり升た

- 一佐野兵衛
- 一長井齋藤別當實盛
- 一堀口次郎兼光
- 一義經の妾静
- 一新中納言知盛の靈
- 一大蛇丸底深

市川團十郎

○市村坐の太閤記己來東京よてハ何れへも出勤なく待よ
待た新富座も年内餘日さく余り押詰りたる加減よや堂も

一息入甲斐なく残念な事でもり升た○一番目録倉山に
 佐野兵衛を勤められ邸の場軍八の使者も出合の場射術の
 一巻と言て猿喉の掛物とさづける處前も中通り今回の
 源藤太と止ましたの三升の思ひ付か是れ尤も事あり
 併し少し淋敷に成升た○軍八が猿の掛物を見て人を痴よ
 するのと言時「イヤおれり痴よいせぬのぢや身が一体痴
 だ」と言處大請く又軍八が抜て切て掛るを取て押さへ
 「コリヤ手も有眼も有殊も大きなのが二ツ有と云るゝ處
 大きも場當りでの有升たが見物の衆嬉しがり升た○源左
 衛門が寐てゐる處へ「不孝物の成敗して呉んと一間を出
 て源左衛門又突掛る處此立廻り息も付ぬ面白くて上評
 でムリ升たト、鎧を捨て刀と抜切て掛るを基盤よて請る
 此基盤よはすお切落し三浦親子を眞此の如くと言處呼吸
 合て感服是れ心腹を聞て跡と引請殿中へ出遣る處よ
 經世が花道へ行を呼留如何して討やと尋ねる處荒次郎と
 討ん心術と言を聞我も同意あり早行けど夫と云すお親子
 別れの思入答へ升た○我も悴も加勢せんと股立を取鎧と
 持出んとする時玉笹が産の氣が付たと聞立歸り又思ひ直
 し行んとする産聲を上る又立戻る思ひ直一行時勇助が赤
 子を抱き出來り和子様でもり升と言さうかと立歸り顔と

見て悦び宜子だナアの幕切此場の兵衛のもうけ場よて場
 請のする處なるが(團十郎丈)愛でり大きお芝居をして見
 せられ一故俗請がして大評判でもり升た何でも芝居をし
 て見せぬといけぬく

○老樹曠紅葉直垂」又長井齋藤別當實盛役曰杵の陣へ來
 らるゝ處のさして仕打な一拵へハ分無○我旅館へ立歸
 る處の馬上よて(芝やこ六)の口取は鞘をかけた長刀を持
 せ立歸る處都て古畫と寫した好み請升た我陣所の寺院の
 廊下よ住居いる体道具の好み目新くく口書巻物と見る
 様でもるての○歸陣さゝる處都より齋藤五齋藤六の兄
 弟揃ふて來てゐるを見て不興の体よて何に參つたと尋
 問する是より兄弟の北國の味方敗軍の由都へ注進ゐるに
 依て若君お願つては加勢に下つてムれば初陣させて下さ
 れと射水の藤太俱くゝ願ふ處不承知よて我中置たる言
 葉も用ひず下向あす事言語同斷汝らごどき者千万騎來る
 とて物の役よ立べきや早々よ立歸り六代君へ大切よ奉公
 仕れ彼是すさバ七生迄の勘當ありと言聞す○此せりも問
 答の内弓よ強と掛籠よ矢と並べあよて芝居つけ小ども
 な一〇此内よ腹よ十分狂言をして表面お平生の形作
 よて活歴屋さんの請たろうが女子供あどいあくびだつた

の○兩人のせひあく藤太を送られて花道へは入只後見送つた斗りにてもはや夜も入たるは燈りの用意致せと奥へは入口益々濼い子併し斯言事の余人の真似ても出来な(真似させ度無チ)感伏の外あり○今井四郎兼平忍び來る雑兵取巻立騒ぐ聲と聞與より出來り兼平と顔見合せ我敵陣へ遣一たる忍の者なりと雑兵を遠ざけ上へ請ト敷革を出し坐も付せ來意を聞是より兼平の木曾殿昔の恩義も老公と客分よせん事と乞由演説す是は答へる問答鉄石心ある事と述るのけ合のせりふ爰何しおふ(三升)(霞仙)兩優の息込分ち感伏と言より外評言なり○兼平の如何様説客しても心動かざる感心して立歸る是より今井の言葉の内よいかやう討死ある心よても木曾殿の命令にて齋藤が陣と見るなら必ず軍さし歸せと觸出し有由を思ひ巡らし一と通りにていと思入有て白髪と染る氣に成と言處が此演劇中眼目の處にて士卒を呼出し氷と持と言付長櫃の中より硯石と鏡を取出一面と寫し髭となで烏帽子と取て物白髪を見せ唐詩を吟トてア、我々が老たりと言せりふにて此道具廻るさて余り狂言仕を過て困る口此丈の思入の油断をすると思見殘し升爰らみ至つて彌々濼い事婦女子に向通せず閉口く○道具元の臼杵の陣

成て討死の評義など有て又實盛の陣へ戻るともこや白髪を墨染赤地錦の直垂を着て床几に掛り居る爰へ藤太立歸り來て此体を見て驚ろく討死の覺悟を語る藤太も怒て是より別れの盃さよ成はとゞぎす嗚是へのけてせりふ有て歸るよしのすだあと言幕切又成○爰の評する處もあし
 ○一休此狂言のせりふ遣ひ等余り高尙過殊よゆくと言事が澤山過て耳うるさく思ひ升た

○繩口次郎兼光役首實檢の場義仲は呼出され實盛の首目利を言付る處一目見るが實盛と知り腹巻桶を取寄首を洗ひたる處墨の落て白髪に成此首と抱へて愁歎の處の例の辨舌と言せりふ廻りの上手なにて腹も答へ思はず涙をこぼし升る此實檢場の存外悲しみも有て面白ムり升た
 ○今回の狂言の立方の一番目々鎌倉山中幕が活歴史の實盛二番目物と言物が無ありて謠曲掛りの舟辨慶と都而堅い物盡しよて大切も水鳥記位な和ふか物あての女子供や男子よても若イ者杯より不向めて如何奇物のと案トての升た夕案の上久し振の末廣屋より一年戀れた(團十郎)左團次(芝翫)福助の顔揃の上も普請と奇麗にして直段を安くし夫でわりく見物が來ぬ一時節がふくれたと言あからしめり殘念あ次第で有升一休鎌倉山の狂言の堂も淋

い仕組よて例演ても余りヤンヤと見物の來ぬ狂言我等若年の頃天保の末の木挽町の座よて鎌倉山と鏡山とあひ交せよして花見又鷹野草り打み建長寺部屋又佐野郎の場奥庭に殿中と打て違ひよ見せ役者の岩藤源左衛門（海老藏七代目）尾上又荒次郎兵衛（澁と言れし團藏）此趣向大當りよて有し此後に當たと覺へし事無○扱又中幕の活歴史仕立てて日本外史とどの記隠てゐる衆達を當込で作た狂言あれバかの芝居を見て學問よあると言婦女子よの退屈を覺るも尤もなる次第のやうよ一番目中幕共又息の付る處のあき脚色なれば自然と足の向ぬも道理今より後の片荷すらぬ様よして見せられるが專一あるべし

○舟辨慶又静は前役此狂言の雛殿も五存トの謠曲掛りの演一物よて衣装万端大はり込立派な事で有升たすべて本行を真似るのなれば甘のつた處がつまふん理屈いと二團洲が慰さみ道樂とも言べき演劇併一五器用な事の感伏し升た我等が見て面白い共覺へ又上手とも稱すべきの舞と仕舞よて都名所の所作事あり實よ愛の如何にも女の振事よて天窓のざりくから足の爪先まで女のまきしからざる處なく恐入たとやより外あく數度見升た事あるが見る度毎も甘味がまして大請てムり升此外の知盛の引込の

能のゐんのと評判もムり升たが到底二の舞の批評ののぐれ升ん事でゐるて口思ふて見れば華族衆が道樂に舞て五らんなさる能と同一道理よてやさば自身の慰さみ氣ばらしと遣るゝので是を諷んで見てゐるも實のつまらん咄し夫よりの本職の芝居の方と腕をふるつて見せらるゝ方が見物の嬉しがり升向後此人は限らず能掛りの演劇のお慶よ頼み升團洲先生も此高尚すつた氣性を直さぬと下手よ劣るとやても可ありですて○イヤ五尤も千万のお説必竟此能掛りよと言狂言の昔の無事よて全く勸進帳の評判が始つた事にて（勸進帳の歌舞伎十八番の内と言愛敬が有別物）近年の流行物なれ共勞て功あり共やべきか○氷鳥記又大蛇丸底深役何の面白さ趣向が有事のと思ひしよ此丈の只顔を出さるゝ迄故評する處あり

○イヤハヤ今回の評判記の小言と理屈で持切て藝評が至つて少く看客へ五覽を乞もお氣の毒又五最負様方へ對いては何ども譯きけれ共やさぬ事の爲よもあらず是も最負の一部分共思召みゆるゝと願升

○千歳座藝評

松麴 千代田 緑林

四千両小判梅葉

九幕

中幕

祇園祭禮信仰記

第三段目の切壹まく

浄 庚申填の森
溜 蔭に晴み迷
理 ふ二人連れ

巢鴨里比翼道行

清元連中

坂東家橋 岩井松之助 三幕目よ
尾上菊之助 尾上菊五郎 相勤めやい

一藤岡藤十
一藥屋是齋

市川 九藏

一千歳講まんだらの十右衛門

○四千両は藤岡藤十郎役新宿辰巳屋の場安御家人と云好
み拵へ都て相應して吉女郎お辰松之助にはまり込重々
通ふ處お辰ふふられて居るが心付ぬ氣持廻りの髪結を
取巻よて随分の安遊びの様よ一伊丹屋徳太郎(家橋)が百
兩の金を持って歸るを立聞する此場の総体評する程の處お
一○四ッ谷御門外の場四ッ手駕お乗て東のわゆみより出
來り爰おて駕より下りて始終新宿の方へ氣を配り徳太郎

の歸りを待心持抜目さ一口水戸様前へのつて本郷へ歸
る人を綱を張てゐるに四谷御門外ハナト油断なり最う少
し先へ行て市ヶ谷御門邊りあつたし爰らの地理よくらさ
作者の誤りあるべし○爰あゐるのん酒賣又聲と掛られて
びつくりして見れば家來筋の富藏(菊五郎)おれば是より
兩人昔語りの世話咄しよなる處の退よ五兩人共東京ッ子
のちやきくイキ肌の腕揃故甘い物でムり升た人殺しを
して百兩斗りの金を取ナア悪イ了簡モット大さお事をあ
さいと富藏お云れ大さよさうかど今夜の仕事を止にして
爰で御金藏へは入事の相談をする處面白い事でムり升た
○爰へ(家橋)が千次(松助)は金とすられ追掛來りト、四
人の世話だんまり又成幕ある此場の大層評判でムり升
たお功者く

二幕目代官町の場此丈にお堀の中よゐて富藏の堀の内お
出て來ると待て金箱を引下一是を富藏と二人して壹箱ッ
ッ脊負歸る處一箱へ小判廿包は入れたのよ一てりチト重
過る様よ思ひれす○記者も大さよ左様思ひ升たが是の
只金高へ對して重のつた物と見へ升た○牛込藤岡宅の場
の盜で來た金を様の下へ隠す始末の處よし富藏の度胸の
能に驚ろさ殺して仕舞んと刀と抜切掛るよ返て富藏また

しるまされ誤る處呼吸甘い事でムリ升た○貸附所の場の
 すつと立派な日那に成る拵へ万端分無富藏が來りたる
 の定て金のことならんと手代千次(松助)を使ひ出女房
 (松之助)とお参りに遣り是よりちよいと膝を崩して悪徒
 よある處請升た一体此役の三河屋よりすつかりはまつた
 役あれば何も仕す何も云すでも藤十郎と云人物の斯き奴
 で有たると見られて強氣な能ムり升た○後金を渡して玄
 關送送り出無事と祝して別れる處吉斗らす千次が歸つ
 てゐて委細の様子を聞れたらとの思入の處十分は請升た
 ○千次も残らず聞たかト聞千次「跡の聞升んに藤十郎」ウ
 ヲさうかト腕組して思入の幕切甘かつた

○此跡へ再度貸附處の場有て女房の離縁藤十郎の捕物
 が有升等あるが預りも成殘念○半屋敷罪狀中渡一の場
 黒羽二重の紋付よお定りの珠數をかけ別あうと云評す
 る處あし只實際を見せる斗りで有り升た

○千歳講さんだらの十右衛門役傳馬町の祖師堂へ夜参り
 の淨るり切へ一寸顔を出さる、斗りあれと拵へ小
 袖の上へ羽織を着た好みすつさりして能ムり升た

○中幕又信仰記三の切せさいの内が出升て是齋實の松下
 嘉平次役此丈よのはまり役あふんと思ひトお大きに不感

心で有升た久吉よ出逢處が此役の眼目あるよ一息答へず
 後腹切も今少し手強くてはーかつた堂も東京役者の時
 代物へかけるとヤンヤト云當りが有升んです口今回の狂
 言の半内が目當されハ四人斗り多き脚色あるよ此中幕へ
 出す物も撰あよつて手錠をはめてゐる是齋と見せると言
 の妙よ罪人を好んだ物です併一是が趣向だと言あらよん
 處あー余り請ふれもせんでそ○何の然れ四ッ谷怪談己後
 梅幸子との出合よて大出来よ當られ目出度ーく春の
 又腕をふるつて世話物の面白い事を待升く

河原崎國太郎

一伊丹屋女房おつぎ
 一六兵衛娘おさよ
 一實の富藏女房おさよ

○伊丹屋女房おつぎ此役の德太郎の繼母よしてお針より
 本妻よ直つたと言わかみさん我産だ次男の丹次郎を連て
 新宿の辰己屋へ來り德太郎の馴染のお辰に逢新宿通ひの
 足の遠退様と頼む處實めいお母親のこあー能こなされ上
 評でムリ升た本郷伊丹屋の場酒に酔てゐる德太郎に異
 見の處も答へ升た○中途より病氣よて引れ此役の(登美
 松)が代りを任られ升たが德太郎の姉の様だとの評是も
 尤も○うんどんや六兵衛娘おさよ實の富藏女房おさよ役
 八年跡あ夫の離縁あり娘おたみ(榮次郎)を育てながら

後家とたて、熊谷驛は暮してゐる處へ斗らず富藏がうと
 んを喰ふと入久一振あて逢し親父が物堅くて夫婦親子
 と言せず他人も成て逢處情合こまのくこあされ合手が
 (梅幸丈)の事もえ一むい愁が利まして大出来でムリ升た
 ○同トく鴨まるのこおて富藏が送り成處へ欠付來り別
 れの場再度の出合にてナトくとい様で一たが十分泣せ
 くれ升た○此役の病氣中(松之助丈)が代りでムリ升たが
 悪く無つたが此丈の方が上評でムリ升た口久しぶりあ
 て戀しいと思ふ夫と逢取亂るる姿はちて一寸盆へ形
 ちを寫し髪の亂れを直す處吉此仕打(松之助)も代りの
 時仕られ升たが念入り返つて請兼せ一た

○信仰記は是齋妻おさち役さしたる事無連中見物の日ハ
 發病前と見へて何高氣無る勤方よて不評○病氣中(傳五
 郎丈)が代り是ハお間合せよて評さ一

岩井松之助

一辰己屋の抱かたつ
 一藤十郎妻おみさ
 一乳人侍徒
 一千歳講遊船宿のね松
 ○辰己屋の抱かたつ役宿場女郎の全盛姿はまり能拵へ万
 端分無辰己屋の場さして評する處もさ一○庚申塚の淨
 るりの色氣も十分有て(家桐丈)つり合能上評でムリ升た
 ○藤十郎妻おみさ役品も有て分無夫が新宿の女郎を請

出すと聞意見の處物堅さこさし請升た後の貸付所離縁の
 場が預りよて残念

尾上菊之助

○淨るりよ千歳講遊船宿のね松役いろ氣有てよ一
 ○中幕信仰作は乳人侍從役五苦勞でムリ升た三の口かん
 酒屋の場が無と此役ハ賊よつまらん端役あり
 ○國太郎病氣よて富藏女房の代り役五苦勞でムリ升た
 一伊丹屋二男丹次郎
 一巾着切早房長太
 一是齋娘おつゆ
 一千歳講木劍の音次
 ○伊丹屋次男丹次郎役序幕辰己屋の場へ母と一處來り
 始終物堅さ息子の様子能こなされ升た拵へ万端相應して
 吉○伊丹屋の場兄へ意見の處篤實よ能出來ま一た奉行處
 腰掛の場いしたる事さし
 ○巾着切早房長太役庚申塚道行の場辰徳太郎の跡を付
 來り塚の後ろへ隠る、處若衆疊の悪徒好み着附の好みも
 梅幸丈の差圖もえ五分も透さし○徳太郎の油斷と見すま
 一紙入を秋花道へ欠込行を富藏よつかまへられ出來り是
 より母親や妹の爲よ盜とするにあわれれ咄す處甘く遣れ
 升たト、富藏よ見顯され實際と白處中々な出來頼母し、
 く○半内の場いしたる事もなし
 ○淨るりよ木劍の音次役よ男振でムリ升た

○信仰記は是齋娘かつゆ役されい／＼振事ハ爰とて評
する程の事なり先形ちのはまり升た五器用／＼此回の役
の取合せ大層奇目先の替り様にて物堅い息子又悪徒小僧
娘形よいきな色男と言仕分夫／＼よこあされ評も能どの
お年又似合す功者事かな是での音羽屋も五安心最負の
御連中も満足る事でムリ升ふ記者も若人役者ガ出来て大
悦／＼併しほ油断あるぞ

○坂東竹松一淨るりよ万燈の方之助役太鼓踊り能出来升
た此子の踊りの素性が能様と思ひ升(家橋丈)御夫婦の五
丹精思ひ遣れ升(ナット細君の余けい)未頼母一ムリ升

○尾上竹次郎一中間トムくり九介役お堀端の場伊丹屋の
場年内の場共能出来升た旗本中間の拵へ分ちし○藤岡
の手代十助の後の貸付處が預りよてさしたる事無○半屋
同心○淨るりの半天着何も吉近頃の大きき腕を上まゝ
○尾上尾登五郎一新入の四人出来升た

○坂東橘藏一辰巳屋の若イ衆さしたる事無○伊丹屋の番
頭手拭の片だすきの居酒屋めいて悪し○駕のきの雲助よ
一○新入の四人出来升た○講中の半天着一ト通りなり
○澤村由藏一田舎役者万九郎の四人メツテン踊りの大評
判でムリ升た寒い時分裸よて誠又五苦勞さま半屋外と館

屋が通る鳴物が相方よ成と言趣向請升た

○相中の衆の内(尾上薪助)の近頃上達しられ毎度當られ
升辰巳屋の若イ者出来吉○伊丹屋の下女も出来まゝた此
外相中の役者衆評の略一升

○片岡仁三郎一中嶋座へ久々出勤してムつたが此前の狂
言々當坐へ顔が見へ升がまだお馴染薄く大した役も付升
んが堂か退屈せず又勉強をされませ頼て五出世の見へて
居升○川嶋左仲太○石出帯刀何れも一ト通りの出来あり

○片岡丸童一辰巳屋の二階廻しお弁大のい／＼○眼八の
子分狐の勘六さしたる事あり○穴の隠居坊主龜出来升た
○尾上榮次郎一富藏娘おたみ役大出来でムリ升た

一野州の富藏
一十河軍平
實の佐藤正清
尾上菊五郎

一千歳講題目の七兵衛
○方今世話場よて天下お敵無と言大強者今回の狂言の
河竹黙阿彌翁が年来心掛けて一編の舞臺へかけて見度と
思ふて居り一が舊幕府の頃の輝る處ありて脚色事もあら
ざりしが(梅幸丈)の頼めて筆を取れ一と言新作物年内の
場が非常の大當りよて意外の見物を呼れ一の役者と作者
の手柄どのやあが全く是迄よ見ぬ目先の變つた趣向よ
て實の面白い事でムリ升た○さて藝評の四ツ谷御門外堀

端の場爛酒賣富藏元の悪徒で有たが今の堅氣も成て稼いでゐると言万端の好み分なく中間奉公としてゐた時分の朋輩九介(竹次郎)傳次(八藏)も出つ會し酒を呑たをさるゝと言處の強氣も罷り升た口爰へ駕から下る客人(九藏)の元主筋の藤十郎もて何の待合せの様子があやしいと聲をかけ是から段々咄が念入御金藏へ忍び込て金と盗んと悪事の相談の處の何いふ三河屋音羽屋兩東京ツ子の出合もて何共角共いへぬ甘味あつて實も感伏でムり升た口御金藏と大きく言て心付邊りを伺ひあひさうか

でんやあでん甘いどのらい」と言あがら元の場へ直る處の實も氣と取た轉智イヤ斯言事をさせたら不思議と言外無です〇後(家橘)(松助)兩人加りり世話だんまりも成百兩の金と拾ふ幕切迄のるくて舞臺が締つて感心く見物一統大請大悦びてムり升た真世話の親玉く口やく味の箱を出してやく味を打捨て此箱へ腰を掛るのちよいと氣と取て思ひ付あるの能考へて見れむろば屋でいゝおでん燗酒のやく味の持てゐぬはづ是ふい如何き物の〇イヤ持てゐると言者も有升が後よりやめたと言噂も有升た〇代間町御堀の場この丈が堀とのり越て金箱を選び出し細引を下て下る勘梅奇と誠も小氣轉が利てさもさうづ

と思はれ感心し升たイヤ盗人の妙も手も入た物さ(油断のあらぬ)金箱の取扱ひも藤十郎より一ぱい重く仕られたが前も評す通り上手過て猶く不感心併一本統も重く見へいのお功者く〇藤十良内の場の金箱と持込來り此金の遣ひ方の注意も藤十良も感心あし余り度胸の能も殺す氣も成切て掛ると引ばづし下駄を身掛へなす處大請く〇一寸立廻り有て金箱にて刀を押へる處の強氣も見た眼の能が爰も至つて箱が急に輕く成て來たの大不承知〇是より藤十良が誤るより堪忍して金を様の下へ藏さんと藤十良の水瓶と持て來る自分の根太板とはなす音

がするを藤十郎がコレと聲を掛る此トタンも邊りを見廻し「おでんや」と言處の見物大請でムり升たが是の序幕も一編遣て見せて請させて有物故ドット請升が實のサト場當り過升た〇貸附の場のスット真事眼も拵へて合羽掛の好み爰の評する處も無藤十良の處へ預けた金と取

よ來た迄もてさしたる事あし口併し最早千七百何がい遣たと言せりふも有升が藤十良の金の貸附て有か格別此人の遣つて仕舞めたの故成べくいハツパと遣ふ處を見せ度ふムり升た〇庚申塚の場の巾着切長太の首玉を押へて花道より出最ら旅人形も成て化てゐる處より是方長太

がわかれお咄しをする。此小僧め何と言やアがると請付ぬ仕打甘い物です後意見して金を恵んで遣る迄よし後お辰徳太良の心中を異見し百兩の金と貸て遣る處まで義の有盗人の性根をみせる處請升た。○熊谷驛うどんやの場斗らすうどんと喰い遣入た内々離縁した女房娘の内にて名乗逢んとするを執六兵衛(松助)が昔堅氣よてわざとよそく敷するよよん處あく他人よ成て互ひよ愁へる處此此丈毎度得意の故人米升寫し大愁歎澤山此場の衆くが女房(國太郎)娘(榮次郎)手揃ひの大出来よて見物一同泪とこぼし升た舞臺功く。○能程よ六兵衛のうどんの仕込このつけよ出て行跡よかつけ晴て女房と呼娘と名乗大泣お成處大出来爰へ生馬の眼八(傳五郎)子分を連れて六兵衛を引ずり來り金を返すの娘と呉るかど難題と云此中へは入五の字の下へ十の字を加へた五十兩の証文と承知して金と歸して遣る處のさしたる事も無れど透問あり。○女房娘よ別れわざと離縁狀を請取す出行處の大さくくよ仕くれ請升た。○同トく榊鼻鴨かど別れの場の親子再度の愁歎場よてナト五月蠅氣味合夫故大さよ悲し味も薄らムり升た。○堂も梅幸三も入念過て困る同ト事あら此場と預りにして藤十郎の捕物の方を見せられたら返て目先が變つ

て退屈も有ましおんだ郎イヤ舞臺好も善悪さ子。○さて評判の牢内の場先幕明の鳴物鍛冶屋の槌の音の能處へ氣が付れ升て大請此場の評の記者も噂さよ聞た斗り目のわたり其体載を見るの今回がはトめて彼是可否する事わたりす只わけもなく眼先新らしく煙あまかれて面白い事でムり升た。○せりふ廻りより立居の行作夫く識者よ付て尋問せられた事の由あれバ悪かるう苦もあく見物一統大賛成く。○今回の脚色は是迄毎度見せられし吟味だの牢問だの引廻りだのと言事一切ヌキよて極初物の牢内斗り見せたと言が狂言の山にて大請でムり升た。○罪狀讀聞せの場はさしたる事無拵へ万端抜目なく引廻りよ成と。言筋よて花道へ引込む此跡が直よ牢屋敷跡の祖師堂よ成と。言趣向實よ感伏く万燈の形ちが捨札よて日遣上人の御難の書を見せる杯の働らさ實よ行届き升た。○富藏の役は此丈よ十分のそまり役故申分のケ處少しもあく大當りでムり升た。○此牢内の場よて中間二人巾着切生馬の眼八等悪人の奴等入牢して爰よて跋を見せられたり大さよ趣向でムり升た。○千歳講題目の七兵衛役の淨るりの大切へ顔と出さるゝまでよてさしたる振事もあー

○中幕信仰記又十河軍平實の加藤正清後捨へ万端紋切形
よて中分無火車の小次兵衛の首と切て捨升たが例も此首
の引抜升が切よりの扱方が正清が強く見へて能が今回
なんで切た物と思ひ升たが後よりの扱事は仕られたよし
なれば大ききよし

○梅幸丈も先の又六の狂言不入りて日限前に樂成一が
今回の狂言がはづれて不入りなす再度東京の五見物の顔の
見ぬとか言れし由なるが思ひの外の大入り成大手柄と顯
いされ逸又一方の大達者の又格別と感伏し升たが幸ひよ
人氣よ叶つて本人もお仕合見物も大安心五魚負の大天狗
先の劇場豊昌の基ひと記者も大悦祝ふて一ツツ升ふシヤ
ンク〜目出た〜

○市川團六(新宿の判人善六〇駕のさの雲助〇新入の四
人何れも一ト通りの出来あり

○坂東八藏(中間ぐでんの傳次出来よし〇眼八子分女鹿
の六藏一ト通りあり

一伊丹屋徳兵衛門
一博徒生馬の眼八
一千歳講洗米の八十八

中村傳五郎

○伊丹屋徳右衛門役此親父役の妙よ能ムり升た元伊丹屋
の奉公人よて引上られて旦那に成たと言人物おて拵へか

人品の様子能はまり升て請升た徳太郎への異見も答へ
てよし併し度々よてチト蒼蠅處も有升た

○博徒生馬の眼八役うどん屋の場いさしたる事おし捧鼻
の場富藏よ逢て悪口と言役人お叱らるゝ處何高おかーお

役にて評する處あー半内の場の富藏よ出會し五十兩の金
をのたり取たる遺恨にてキメ板よてぶたるゝ處脊中の痔
へ物がよくてぶたれる音が妙よ能ムり升た殊よいたさを

こらへる搦梅尻を廻して本統の標でムり升た爰の實よ感
心し升た随分悪い役なるよ身を入れて仕ふるゝの大請あり

○信仰記よ是齋妻國太郎病氣よて代りと勤められ升たが
中く悪いわびあさん實よお問ひ合せ〜

○淨るりよ講中の八十八役よて一寸顔よ見せられ升たの
五苦勞さま

○尾上登美松(辰巳屋の抱おとみ役ちよいと踏る女郎衆
でムり升た〇藤岡の下女おまげ役一ト通りあり國太郎病
氣中伊丹屋の母の代りを勤られ五苦勞徳太郎の姉御の様
で有たとい五尤もの事左もあるへ〜

一髮結木更津の千次
一温鈍屋六兵衛
一隅の隠居音羽の勘右衛門
一與力浦上傳右衛門

尾上松助

○髪結千次の役の此丈の躰に有役故評よし辰巳屋の場藤十郎の酒の相手としてゐる處のさうたる事無四ッ谷門外の場徳太郎の金をさらつて逃て來り後だんせりみなる處の躰の取廻し甘い物で有升た○貸附處の場ハ藤岡の手代も成てゐる處何となく横着る勤め方よし幕切に玄關へ顔を出し富藏との内談を聞たを聞ぬ振をせる思入の處何も仕あさるぬが甘い物でこせへやすまつの女答へ升た

○温鈍屋六兵衛役(仲藏丈)が舞臺を引れても最う跡取が出来たと云ひ此丈の親父方あり斗らず逢た富藏も昔堅氣で愛相もさく邪見も言内も情合をふくんで何共言ぬ甘味でふり升た後ようどんの仕込よのこ付て出て行處まで透間さくうどん屋の場ハ此丈の親父で持てあり升たお功者よなられたる事かな○眼八も引ずられて來る處より後富藏の別れ迄のさうたる事も無鴨の別れも愁の十分あれと前ももや通り重復の氣味もて倦升た是ハ仕打の悪いのであー口大きや喰過の腹合でふつた

○隅の隠居ハ何も仕業もさく愛と云て評する處をよし

○罪狀言渡しの與力の役も評する處あり

○淨るり千歳講の世話も顔の並ぶ迄の事

○中幕信仰記ハ火車の小次兵衛役大した役でもふらぬが

此丈の勤めふるゝので立派よて吉拵へ万端先こんな物か正清に首を振るゝ迄や分あり

一伊丹屋徳太郎
 一下男新作後ハ曾呂利坊
 一千歳講立花の紋次郎
 坂東家橘

○伊丹屋徳太郎役方今突轉一役でハ向ふ敵無と言はまり役辰巳屋の場ハさしたる事あり○お堀端の場世話だんまりの幕切さら〜とこあされ升た○眞面目も能つたのハ伊丹屋の場の生醉なり身持放埒に見せて義理の有弟お家督をゆづらんと正眞の酒の酔の上一倍よつた振をして埒もさき事と言搥梅否に生醉ふらさくして生醉をさのせ實親と繼母も濟あいと言腹をさつと聞せ實ハ此俸の生醉ハ不思議も當られ升た先今回當興行中第一等の出來と言ても譽過で有升舞爰らを見ると此丈も近頃地盤と上られた物と見へ升感心〜○庚申塚道行の場サア斯言處ハ立花屋の十八番毎度情死だこが入てゐる役よてや分なし可否する處なし○奉行處腰掛の場ハさうたる事無

○信仰記ハ下男新作役三の口上かん屋を見せねハ誠ハ端役よて評する處をさしはまり役なごら何高ヒヨ〜と〜て請兼升た尤も仕業もせぬ役あり拵へ万端紋切形よて吉

○淨るり立花の紋次郎役さしたる振事も無只顔揃ひの

五趣向迄あれハ評無併一最負連ハ嬉しがり升た

一興柴築前守久吉

片岡我童

一八州同心濱田左内

一半名主松嶋奥五郎

○坐頭丈今回ハ役が少ク中幕信仰記よりの出興柴久吉の

役接へ万端立派よて吉此狂言ハ舊主人松下嘉平次ハ出會

の處が眼目の場あるが何高物足すヤト不請でムリ升たハ

嘉平次が身が入ぬの今一息堂かと言處で有升た後唐装束

おあらゆる、處衣装ハ立派でムリ升た近頃デソ、物が流

行ぬ故此三の切も久々にて出升ハ事なるが何高筋が通ら

ず(わらぬのかも知んて)見物が不満足で有升たお、い

事あり

○濱田左内の役ハ富藏を鴨かごで送る警固の役人慈悲と

もつて富藏に女房子親父を逢せると言もうけ役さして見

る處あし仕業も無れば評する處な

○半名主ハ是もさ一たる狂言もあ一坐頭の五身分あれば

半名主と言當り役此趣向丈の事よて評する處あ

○淨るりハ長房の玉藏役是又顔揃ひ迄の事一寸(松之助

丈)と口解もよふの振事が有迄の事併一地天窓地顔と言

物ですか、最負連の女子ハ涙で有升たろうて

投書家人名

○立見小僧 ○井山人 ○壽喜田

○琴通舍 ○馬加太 ○淺草竹宗

○金多樓 ○尾蝶子 ○喜尾伊仙女

○神田劇通 ○老込仙人 ○威堪能

明治十九年 出版御届

庚申

日本橋區堀江町
貳丁目二番地平民

編輯兼團扇
出版人蜜柑問屋 植木林之助

京橋區銀座貳丁目拾二番地

印刷所 愛善社

